

(市
大樹)

木簡出土遺構		点数(うち削屑)
B期	B期造成整地土	6 (0)
	SK4060	32 (20)
	SK4064	135 (121)
	SK4066	248 (229)
	SK4069	525 (499)
	SD4089(堆積土)	709 (607)
	SD4089(埋立土)	54 (42)
	SD4090(堆積土)	225 (171)
	SD4090(埋立土)	9 (0)
	SK4096	30 (12)
C期	SK4097	251 (232)
	C期造成整地土	7 (3)
	SD1347 A(堆積土)	340 (280)
	SD1347 B(堆積土)	21 (19)
	SD1347(埋立土)	8 (5)
	SE4080	15 (15)
C期以降	SB4070	2 (2)
	SD4072	11 (2)
	SD4094	2 (0)
その他	SD4095	5 (0)
	SK4063	2 (1)
	SD4071	1 (0)
	SK4061	1 (0)
遺物包含層		11 (2)
合計		2650(2262)

奈良・飛鳥寺南方遺跡

卷之三

所在地 奈良県高市郡明日香村飛鳥

調査期間
一九八四年（昭59）七月

三
一九九三年二月—三月

発掘機関
奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

調査担当者 一 代表 狩野 久、二・三 代表 牛川 喜喜

遺跡の種類 官衙遺跡か

遺跡の年代
一 七世紀～中世、二・三 七世紀～一〇世紀

遺跡及び木簡出土遺構の概要

飛鳥寺南方遺跡は、北を

飛鳥寺南方遺跡は、北を
飛鳥寺の寺域南限、南を伝
承飛鳥板蓋宮の北限、東を
酒船石のある丘陵、西を飛
鳥川によつて画された平坦
部に所在する、七世紀の遺

構群の仮称である。

一の調査は、農業用倉庫



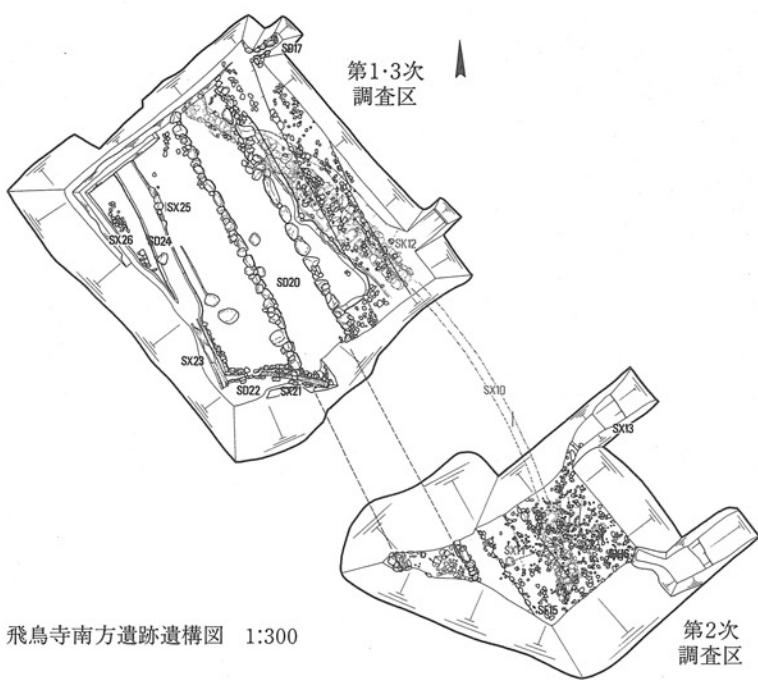
(吉野山)

飛鳥寺瓦窯の南約九〇mの地点に、東西三m南北八mの調査区を設定し、七世紀中頃以後の礫敷、藤原宮期以後の南北素掘り溝・土坑、中世以後の東西溝などを検出した。木簡は一点で、礫敷下層にある自然流路の埋土（暗灰色粘土）から出土した。共伴遺物は七世紀前半から中頃までの土器・銅鉱滓・瓦片・木片などである。

二・三の調査は、広域下水道工事に伴う事前調査である。調査地は飛鳥寺瓦窯の南約一五〇mの地点で、発掘総面積は二四五²m。検出した主な遺構は、A期（七世紀中～後半頃）の石組溝SD二〇、木樋SX二一、B期（七世紀末～八世紀初頭頃）の石組溝SD二〇、木樋SX二一、二三、石組溝SD二三、木樋抜取溝SD二四、石列SX二五、石敷SX二六、C期（九世紀初～一〇世紀初頃）の石敷舗道SF一五、石組溝SD一七、石敷SX一六などである。

木簡はB期の石組溝SD二〇から出土した。内訳は、二の調査で四点、三の調査で一六点（うち削屑一五点）である。この溝は北へ流れる基幹排水路で、A期の石組暗渠を覆う整地土の上に堆積した土砂上面から掘り込む。幅約四m溝底幅一・七～二m深さ最大〇・八m。両岸の側石は、長さ一・一～〇・六mほどの大型の花崗岩が一段、または一抱え大から人頭大の玉石が二、三段残る。共伴遺物は土器・瓦・埴輪・土製品・砥石・砂岩切石など。土器の大半は七世紀末から八世紀初頭までのもので、SD二〇がその頃の時期を中心とすることを示すが、一〇世紀まで存続した。

なお、明日香村教育委員会が調査した酒船石遺跡の石組溝SD一〇はSD二〇の上流にあたり、ここからも七世紀後半から八世紀初頭頃までの木簡が四〇〇点以上出土している（本誌第二〇・二五号）。



飛鳥寺南方遺跡遺構図 1:300

8 木簡の釈文・内容

三 飛鳥寺南方遺跡第三次調査

一 飛鳥寺南方の調査

(1) 「〔杉カ〕」

(129)×28×3 039

(1) 「生出乎月」

(176)×(15)×2 081

下端折れ。全般的に腐食しており、墨痕の残りは極めて悪い。赤外線デジタルカメラを使ったところ、第一文字目の木偏はほぼ確実で、旁は「ス」がかすかにみえる。「杉」の異体字「枚」であろう。

二 飛鳥寺南方遺跡第一次調査

(2) 「〔人マカ〕」

091

(1) 「」

(147)×(10)×3 081

(1) 「〔意カ〕」

〔飯前〕

〔日〕

(147)×(10)×3 081

(2) 「〔乎〕」

〔而〕

〔二月カ〕

〔日〕

〔日〕

(230)×(11)×2 081

9 関係文献
奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』一五(一九八五年)

同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一一(一九九二年)

同『飛鳥寺南方遺跡発掘調査報告』(一九九五年)

奈良文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一八(一〇〇四年)

(市 大樹)

2003年出土の木簡

(1)は四周围いずれも原形をとどめない。下端は切断。墨痕は極めて薄い。古拙な書体で釈読は難しい。(2)は四周围いずれも原形をとどめない。表裏ともに文字のほぼ中央でまっすぐに割れており、左辺・右辺とも廃棄時の割截か。裏面は表面よりやや大振りな字である。